

# ユスト高山右近の生涯と信仰

90

## 父の死と新たな殉教へ

手し、病者のために祝別された油を額と手に丁寧

に塗りました。

文禄4(1595)年にあって、ユスト高山右近の父ダリオの容態は悪化し、最後の時が近づいてきました。枕元には、ダリオの妻マリア、右近の妻ユスタ、長男ジョアン、幼子ユスタ、家族がそろう、宣教師たちも集まっていた。宣教師たちは、ダリオに主の苦難を語り、勇気と信頼の念を起こすように努めました。終油の秘跡(病者の塗油)を授けるために、年老いたオルガンチノ神父が入ってきました。この神父は、ダリオと同じ年頃で、堅い信仰に結ばれた親友であり、信長の時代から幾多の困難を乗り越えてきた同志でもありました。オルガンチノ神父は、静かにダリオに按

ダリオはたびたびイエスのみ名を唱え、最後に十字架のしるしをしました。周りにいるすべての者が声を合わせて祈りをささげる中、ダリオは息子右近の腕に抱かれて静かに息を引き取りました。

向けられていました」(1596年11月15日付書簡)と、メシア神父は書き残しています。ダリオは、自分の遺体を長崎に運び、キリシタン墓地に葬るようにと、言い残してしまいました。右近はその言葉どおり、仮に埋葬したのち長崎に運びました。長崎で行われたダリオの葬儀は、長崎の教会始まって以来の盛大なものだったと、伝えられています。

その背景には、右近の立派な生活ぶりに感化されたことや、右近からの直接的あるいは間接的な働きかけがありました。しかしながら、教会側としては薄氷を踏む思いでありました。いつ秀吉の感情が爆発するかわからないし、秀吉によるフィリピン、ルソンへの交渉は、秀吉の思惑どおりには運んでいませんでした。そのような折、1585年1月28日に小勅書「司牧的任務」により、イエズス会以外、いかなる聖職者も日本で布教を行うことを禁じられていたにも関わらず、フランシスコ会士ペトロ・パウチスタ神父がルソンからの使節として、日本に上陸したのです。マニラから来た修道士たちは、日本人協力者の警告に耳を貸さず、公然と布教活動を始めました。それが新たな殉教を生むのです。

寛容さ、貧しい人への慈悲、とくに慈善事業にこんな心を配った人に今まで出会ったことはありません。あるとき、飢えと寒さで息絶え、そのまま放置された人たちがいました。彼はすぐにこの人たちの亡骸を自分の家に運び、まるで身内か友人のように悲しみ叩いてやりました。彼の心とまなざしはいつも、病人、流刑人、孤児、貧しい人たちに

「ダリオのように、その寛容さ、貧しい人への慈悲、とくに慈善事業にこんな心を配った人に今まで出会ったことはありません。あるとき、飢えと寒さで息絶え、そのまま放置された人たちがいました。彼はすぐにこの人たちの亡骸を自分の家に運び、まるで身内か友人のように悲しみ叩いてやりました。彼の心とまなざしはいつも、病人、流刑人、孤児、貧しい人たちに

模範的なキリシタン大名であり、教会の父であったダリオを喪った悲しみの中にあっても、日本の教会は盛況を見せていました。文禄3(1594)年には京都地方だけで500名ほどの洗礼がありました。その大部分が身分の高い武士でした。秀吉を怒らせることを恐れて、教会側が洗礼を遅らせた人もおり、実際にはかなりの人がキリシタンに傾いていたのです。

その背景には、右近の立派な生活ぶりに感化されたことや、右近からの直接的あるいは間接的な働きかけがありました。しかしながら、教会側としては薄氷を踏む思いでありました。いつ秀吉の感情が爆発するかわからないし、秀吉によるフィリピン、ルソンへの交渉は、秀吉の思惑どおりには運んでいませんでした。そのような折、1585年1月28日に小勅書「司牧的任務」により、イエズス会以外、いかなる聖職者も日本で布教を行うことを禁じられていたにも関わらず、フランシスコ会士ペトロ・パウチスタ神父がルソンからの使節として、日本に上陸したのです。マニラから来た修道士たちは、日本人協力者の警告に耳を貸さず、公然と布教活動を始めました。それが新たな殉教を生むのです。

# 「カテキズムの学び」

## 第23回 新型コロナウイルスとカテキズム(その3)

復活祭を迎えました。徹夜祭では、大蠟燭から会衆が持つ蠟燭に火が移され、聖堂全体が光で満たされます。それは、私たち一人ひとりの信仰だけでなく、教会全体の信仰をも表しています。

聖パウロが示す「キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長する」(エフェソ4・13)というキリスト者の成長の理想はよく知られていますが、この成長は、私たち信者一人ひとりの課題として挙げられているだけでなく、カテキズムは教会全体にもこれを当てはめています。

キリスト者とはキリストを頭とするからだの肢体なので、自分たちの一貫した信念や行いによって教会の建設に寄与します。教会は信者の聖性によって大きくなり、成長・発展し、ついには「成熟した人間になり、キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長するのです」(エフェソ4・13)(2045番)。

一人ひとりが教会という肢体の一部であることは、大きな恵みであると同時に大きな責任でもあります。

救いの知らせが人々の前にその真理と輝きの力を表すためには、それがキリスト者の生活のあかしによって裏づけられなければなりません。キリスト教的な生活によるあかしと、超自然的な精神をもって行う善業は、人々を信仰と神へ引き寄せる力を持っています(2044番)。

私たちの生活は、ことにコロナ禍の状況下において、救いの真理と輝きの力を示すあかしとなっているのでしょうか。

復活節第2主日は神のいつくしみの主日と呼ばれますが、以前は白衣の主日と呼ばれていました。復活徹夜祭で洗礼を受けた新信者は、洗礼式の際に授与された白衣を着て一週間教話に参加し、この主日(または前夜)に脱ぐ習慣があったからです。白衣を脱ぐというのは、信者としての身分を捨てるという意味ではなく、その逆に、これからは衣服ではなく生き方そのもので信者であることをあかしするという勧めだったのです。(文 酒井俊弘補佐司教)

# 訃報



ジャン・ポール・ベズロン神父(パリ外国宣教会)は、3月6日、フランスのモントパン病院で新型コロナウイルス感染のため、帰天。92歳。フランス出身。

牧。76〜80年、日本管区長、80〜92年、宣教会の総長に選ばれた。92〜95年、香里、95〜2004年、東京カトリック神学院で霊的指導司祭として神学生養成に携わった。12年、本国に戻り、本会老人ホームに入る。自分に厳しく控えめで、鋭い感受性の持ち主だった。

# 「アフリカ」難民移住者

## 「すみませんの社会」と「ゆるそうの社会」

アフリカ大陸出身の人たちに聞くと、アジア人の私たちと思考や行動パターンがかなり違うことがわかります。

「アフリカ大陸出身の人たちに聞くと、アジア人の私たちと思考や行動パターンがかなり違うことがわかります。緑あつて私はブルキナファソに生活の拠点を置く森重裕子さんという人に出会い、彼女とアフリカ談義を楽しむようになりまし。森重さんは「一言で表現するならば、日本って、すみませんの社会だけれど、アフリカ諸国って、ゆるそうの社会なんです」と語りました。「人間誰でも障害を持って生まれてくる。それが成長過程で矯正されて社会の枠組みの中に納まっていく。でもブルキ



ナに比べると、日本だったから明らかに発達障害とかナント力障害だとされる人が矯正されず社会であるままに仕事している。日本だけ違う特性を謝りつつ、どうにか社会の中に入れてもらえたら、ブルキナは周囲の人が、ゆるそう、と受け入れて社会を回している。この「すみませんの社会」と「ゆるそうの社

会」は私にとつて興味深いテーマとなりました。今、国会では入管法に新たな強制送還拒否罪という刑罰を作るとの審議が進められています。例えば、服役経験のある人が「家族が日本にいるから」といって強制送還を拒否したり、難民の不認定を受けた人が迫害の恐れのある国への送還を拒否したりすれば刑罰の対象になるというものです。難民申請者は、本国送還か日本で刑務所に入るかの二者択一を迫られ、さらに私たちも送

還を拒む人を助ければ共犯罪を問われるのです。「すみません、日本に住まわせて下さい」「服役の過去があつてすみません」「迫害の国から逃げてきただけですが、すみません」と頭を下げ続けると社会に入れてもらえない今でも見ているだけに息が詰まりそうなのに、送還を拒めば処罰の対象になるなど私には受け入れ難い社会のありようです。取り急ぎ私は審議中の入管法を廃案にしようとする署名を集めているところです。私たちがもう少し「ゆるそうの社会」から学んで窮屈さから解放されたいと思いませんか。(文 シナピス事務局 ビスカルド篤子)

**カトリック墓地 納骨堂・納骨所 使用者募集**

大阪教区の信者の方のみがお申込みいただけます。詳しくはホームページをご覧ください。

教区ホームページ右上のこのバナーをクリック▼

カトリック墓地 納骨堂・納骨所

教区本部事務局 管理課 竹中  
☎ 06-6941-9705

